

大阪

あんなとこ
こんなとこ

「黒門市場」

食い倒れの街「大阪」の食の宝庫として名高いのが、大阪市中央区日本橋にある黒門市場。今回は、一日の平均来場者1万8千人、年末には一日平均15万人が訪れるという活気溢れる黒門市場について調べてみました。

市場の起こり

黒門市場の歴史は古く、「摂陽奇観」の中に「文政5年（1822）〜6年の頃より毎朝魚商人、この辺に集まりて魚の売買をなし、午後には諸方のなぐれ魚を持ち寄りて、日本橋にて売り捌くこと南陽の繁昌なるや」とあり、この記述が黒門市場の起源であると考えられています。その後、この魚市が発展し、明治35年（1902）大阪府の公認市場として認可されました。当初、圓明寺という大きな寺の近くであったことから圓明寺市場と呼ばれていましたが、寺の黒塗りの門が印象的だった為、次第に黒門市場と呼ばれるようになったそうです。また、江戸時代には、罪人がこの門をくぐり千日前の刑場に向かったと言われています。圓明寺と黒門は、明治45年（1912）の難波の大火で焼失し現在は残っていません。

市場の名称「黒門」については、難波の大火で黒こげになった門が残ったから。大阪の町の南端を示す黒塗りの町木戸があったからなどの異説もあります。

二度目の焼失

大正時代には、中央市場をも凌ぐ勢いで発展し「中央市場には無くても黒門へ行けば」と言われるようになりました。昭和に入り、市場は益々活況を呈し、年末の四日間は寝る時間が無いほどの忙しさだったそうです。昭和20年（1945）市場界隈は空襲で焦土と化しましたが、戦後まもなく元の商人たちが集まり、いち早く市場が再建されました。昭和35年（1960）〜40年にかけて夜店の全盛期となり、昼間の営業店が閉店すると夜間営業店が開店し、早朝から夜間まで大変な賑わいであったといえます。現在は、近隣だけでなく国内外からの観光客も多く訪れる元気な市場として知られています。



アーケードの天井には魚のオブジェ

掲載の記事・写真・イラスト等の全てのコンテンツ無断複写、転載を禁じます。

(株) ファッションビジネス・御堂筋新聞